

留学体験記

地域教育文化学部 異文化交流コース 5年

尾形 千紘

留学先：チリ、国立タルカ大学

留学期間：2017年8月～2018年7月

初めて南米を訪れたのは、約2年半前の短期派遣。あの時参加していなければ、日本のほぼ反対側にある、チリへの留学を考えることもありませんでした。大学4年次の夏からチリへの留学を開始し、留學生活も残り一か月を切った今、自分にしかできない留学を経験できたと確信しています。

「どうしてチリなの？」日本を発つ前、そしてチリに来てからも、たくさんの人に聞かれました。チリへの留学の動機は、大きく分けて二つあります。一つは、英語以外の第二言語（スペイン語）を習得すること。初めは英語圏への留学を考えていましたが、せっかく留学をするなら、英語以外の言語を学び、世界でコミュニケーションを取れる人をもっと増やしたいと思いました。二つ目は、チリにおける英語教育の実態を明らかにすることです。私の専門は英語教育であり、チリには14年前から、英語教育の向上を目指すプログラムが存在します。特に、南米諸国が取り組んでいる英語教員の質の向上、サポート面でプログラムがどのように機能しているのか、チリの英語教育を通して学びたいと考えました。

私がチリでの留学を通して得たのは、スペイン語の習得はもちろんですが、一番は、苦しい状況の中でも前を向き、行動し続けるバイタリティです。これが得られたのは、特殊な留学の環境のおかげだと思います。チリに着いた当初、私が初めに直面したのは、言語の壁と孤独でした。留学先のタルカは地方都市であるため、首都のサンティアゴのように英語が通じる場所はありません。また、チリのスペイン語は、南米の中でもくせがあると言われており、話すスピードが速いことはもちろん、特別な表現や言葉が会話の中で数多く使われます。留学前、スペインのスペイン語を勉強してきた私にとっては、「とんでもない所にきてしまった…」というのが感想でした。更に、私の専門は英語教育のため、教育学部での授業は基本的に全て英語です。そのため、自分から積極的にスペイン語を学ぶ必要がありました。そこで私が始めたのは、「笑顔を心がけること」、「今の環境をプラスに考えるように努めること」です。今のありのままの自分を一度受け止め、常に自分と向き合い続けました。そして、スペイン語が話せないながらも、たった一人の日本人学生として、留学生の中で一目置かれる存在になりました。知らない土地で一人で生きるということ、新しい世界に飛び込むことの困難さを痛感するとともに、私にとって、この経験こそが留学で一番価値のあるものだと実感しました。

留学を決断する前は、一度留学を諦めて、就活を始めたこともありましたが、しかし、就活を始めたことで、「これまでずっとしたかった留学を諦めてまで、今すぐ就職する必要があるのか」と考えるようになりました。「自分は自分、人は人」これはいつも私が大切にしている言葉です。もし、就活を理由に留学を迷っている人がいたら、自分の心の声に従って、留学を諦めて後悔しないかを考えてみてほしいです。留学は、自分の努力次第で、いくらでも価値のあるものにできます。

また、私はチリに来てから、以前よりも格段に南米が好きになりました。将来ここに住みたいと思えるくらい、南米の人や文化が大好きです。以前は考えたこともありませんでしたが、今は、中南米と日本を繋げる仕事に関わりたいと思っています。日本では南米と聞くと、治安が悪いというイメージが先行しがちですが、南米の人たちは本当に温かく、陽気で面白い人たちばかりです。スペイン語を習得したことで、彼らとコミュニケーションを取ることができ、本当に嬉しく思います。日本で生まれ育った私にとっては、南米のすべてが刺激的で楽しいです。せっかく留学をするなら、未知な国

に行った方が断然面白いと思います。

私の場合、短期派遣に参加したことで南米に興味を持ち、長期派遣に至りました。このダブル・トライアングル・プログラムを通じて、たくさんの仲間や尊敬できる先生方に出会い、今回のチリでの留学においても、様々な面から支援やサポートをして頂きました。今回の留学に至るまで、私に関わってくださった全ての方に感謝したいです。本当にありがとうございました。



留学生の歓迎セレモニー



観光地で有名なチリ南部の Valdivia



チリのファストフード、completo



イベントで着物を着て参加



アタカマ砂漠にあるアタカマ